

情意領域育成を目指した終末期教育の授業開発

—看護学1年次の死生観調査より—

桑迫 信子

Course Development of Terminal Education
for Cultivation of Students' Affective Domain:
Based on Views on Life and Death Surveyed
among First Year College Students

Nobuko KUWASAKO

キーワード：情意領域、終末期教育、死生観

I. 緒論

1. 高齢社会と終末期

日本は、高度経済成長を支えてきた世代が形成する超高齢社会となった。併せて核家族化や単独世帯が増え¹⁾、人生の最期を住み慣れた家で迎えたたくても医療機関や福祉施設での別れが多く²⁾、看護師や介護福祉士を志す若者にとって看取りの経験は希薄である。国の方針としては、看取りを「医療モデル」と「生活モデル」との共存とし、介護保険制度を活用した地域における医療と介護の一体的な取り組みを目指しており³⁾、今後ますます看護と介護福祉職とのチーム協働の見取り体制が必要となるだろう。終末期の概念について川島(2010)は、社会構造の変化およびその時代に生きる人間の価値観の変容に伴い、ケアの理念も併せて常に進化し続けているとし、ケアの対象者が「個人」から「個人および家族」に拡大していることや、高度化した医療的支援ばかりではなく介護や福祉などの社会的支援を含めた包括的ケアを示した概念であることなどを挙げている。そして、終末期について「残りわずかな時間であっても、今、ここに生きていることを支援可能な体制整備を行うことによって『生きることの集大成』を支えることができる」と述べている⁴⁾。行動力を備えた高齢者層であることや、多様な生き方の選択肢、社会的な人権意識の高まり、個人主義の浸透もあり、さらに質の高い個人尊重の生活支援が求められる。そのためには、看護師養成や介護福祉士養成の1年次において学習初期の段階から(以後、「初期学習段階」、初期学習段階にある者を「初期学習者」とする)終末期教育を受ける機会を準備し、終末期高齢者の身体的・精神的な変容を理解することや、看取りなどの生活経験が乏しい現実を補えるよう効果的な教育方法を検討する必要がある。そこで本研究では、看護学初期学習者を対象に終末期教育で受ける情意領域^{*}への効果を分析し、教育的示唆を得ることとした。

※「情意領域」とは、『保健師助産師看護師学校養成所指定規則』に則ったもので、看護師養成機関における認知・情意・精神運動の三領域からなる学習構造の中のひとつ。

2. 看護学生の終末期教育

死の研究においては、不安という否定的な側面からではなく、死への態度を多元的にそして肯定的側面からもとらえる方向へと発展させる考え方や⁵⁾、感情的側面のみではなく、生や死ぬ過程といった死と切り離して考えることのできない部分も含めて捉えられる「死生観」の育成が必要とされている。このような教育はデーケン^{※1}によって「死への準備教育」と呼ばれ、自分の死に対する死生観を確立するとともに、他者の死に備え対応するための心構えを育むことが目的だとされ、看護師にとって重要な力とされる。看護学生は、臨地実習が契機となり死生観をもつようになるという報告が多いなか、丹下（1995）は、死の準備教育として直接的に他者の死を経験することのみが死生観を決定するわけではなく、間接的な死の経験を通してであっても死生観は同様に形成される⁶⁾と述べている。学習者の経験を待つのではなく、教育者の積極的な授業開発により学習効果が期待できるわけである。また、風岡ら（2006）は、死生観教育での学年変化は殆どなく思索の機会を多くつくり教育する必要性がある⁷⁾という。以上のことより、命に関する早期の教育的取組みは情意領域の育成につながるのではないかと考えた。

II. 研究目的

看護学1年次における「死生観」を把握し、情意領域の教育効果を引き出す授業の開発を目的とする。

III. 看護教育の概念枠組みと操作的言葉の定義（図1）

この概念枠組みは、対人援助職者に必要とされる能力の構成図である。成人学習者は、既に専門職の選択をしており個人の意志に伴う興味や願望は備わっているが、意志力や自己統制力を維持向上させる必要がある。また、多様な価値観に対応できる感受性を育み、自己のとるべき態度の明確な方向性と意欲的な行動力の源となる情意領域の育成が不可欠である。全能力の基盤となる情意領域は、学習者自身の忠誠心やコミュニケーション技術への影響が大きく、看護サービスに直接反映される力である。

- ・「死生観」とは、生きる意味や生の延長線上にある死への考え方や価値観とする。
- ・「終末期教育」とは、死期の近づいた高齢者の身体的・精神的・社会的特長、苦痛の意味や援助方法などの学修に加え、思いやりや共感性などを育成する内容とする。

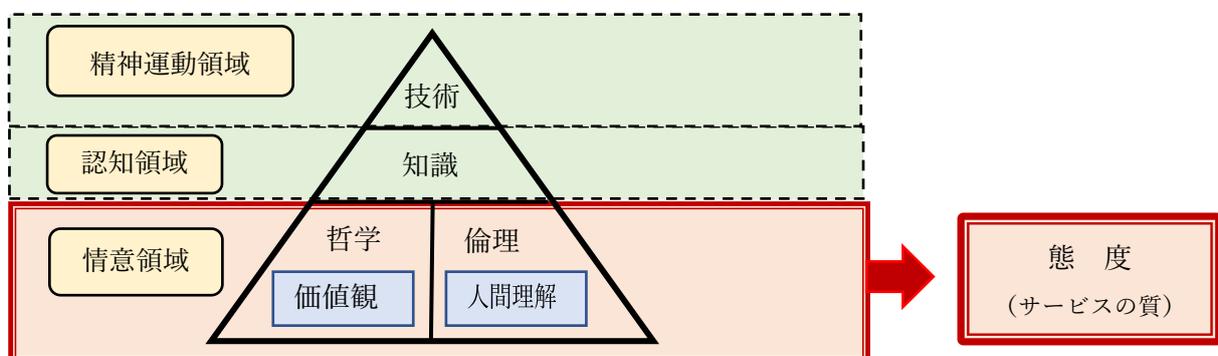


図1. 対人援助職者育成の構成（蛭江^{※2}の作成したものにに基づき筆者が一部加筆した）

※1. アルフォンス・デーケン：上智大学名誉教授、死生学（ドイツ、哲学者）

※2. 蛭江紀雄：広島文教女子大学、人間福祉学（平成29年度介護教員講習会資料：公益社団法人 日本介護福祉士養成施設協会）

IV. 研究方法

1. 調査対象

F 看護専門学校の平成 26 年度と 27 年度の 1 年生 (154 人)

2. 調査期間

平成 26 年 8 月～平成 28 年 9 月

3. 調査内容

予備調査として年齢および性別の基本属性と、平井ら(2000)の開発した「臨老式死生観尺度」(以下、死生観尺度とする)⁸⁾調査を行った。その後、グループワークを 5 回実施し全過程終了後に再度死生観尺度と「生と死」に関する自由記述式の調査を行った。

4. 使用尺度

測定に用いた死生観尺度は、「死後の世界観」「死への恐怖・不安」「解放としての死」「死からの回避」「人生における目的意識」「死への関心」「寿命感」の 7 因子 27 項目から構成される。各質問項目に対する回答は、「当てはまる」「かなり当てはまる」「やや当てはまる」「どちらとも言えない」「やや当てはまらない」「ほとんど当てはまらない」「当てはまらない」の 7 件法で構成されている。本尺度は、生と死についての考えを 1 人称で尋ねており、学習進度や青年期の特徴をふまえて死生観の測定に妥当であると考え使用した。また、本尺度の構成概念確認のため得られたデータにて α 係数を算出した結果、 $\alpha=0.77$ と高い信頼が得られた。

5. 分析方法

死生観尺度調査の前後の検討には t 検定を行った。統計的有意水準は 5% とし、統計解析ソフト IBMSPSS (21.0) にて分析した。また、全過程終了後の自由記述式調査用紙は KJ 法を用いてカテゴリー化し、「生と死」に対する捉え方を評価した。

6. 調査対象者の特徴と調査手順

- ① 目的を持ち主体的学習に臨む学習者という特徴はあるが、入学直後は慣れない環境への緊張が考えられる。学習への弊害を避けるための配慮として、入学後半年経過した時期を設定し授業外の時間を活用した。
- ② グループ内の関係性を深め協力した取り組みができることを期待し、協同学習⁹⁾を取り入れた。6 人前後のグループ構成とし、ケア的な因子も含め安心して参加できる環境づくりを心がけた。
- ③ 学習進度としては、基礎から各領域別の目的論へと展開されている時期で、臨地実習の経験はない。ライフサイクルについての内容を既習または進行中で、成長各期の特徴を理解しつつあると判断した。
- ④ グループの話し合い(以下、ワークとする)を行う準備として、自宅学習にて医療の記事を基にした感想を自由記述してもらった。その中から、内容の多い「生命のはじまり」「出生前検

査」「赤ちゃんポスト」「中絶」「虐待」「尊厳死」「安楽死」「自殺」「孤独死」「臓器移植」に分類した。その後、協同学習の相互依存関係を促進させられるよう、意図的な小グループを創った。

- ⑤ワークは1コマ(60分)で5回設定し、対人技能や小集団での運営技能が活性化するよう「テーマを選んだ理由と内容の紹介」「2人称に立場変換し何を感じるか」「1人称に立場変換し看護師に何を求めるか」「命について自分達の考えをまとめる」の課題を呈示した。最後は、グループ活動のまとめ作業とした。
- ⑥筆者は巡回しながら参加観察し、質問や参考資料の提示に応じた。留意点としては、学生の意見や感情を傾聴し教師からの刷り込みがおきないように配慮した。
- ⑦まとめとして6回目に、各グループ10分程度の発表をした。
- ⑧第1回目のワーク開始前と6回目の発表終了後に、死生観尺度調査と「生と死」への思いを自由記述してもらった。

V. 倫理的配慮

調査用紙記入の目的と倫理的配慮について口頭及び文書にて説明した。記入の有無による不利益はないことや、個人情報保護データは研究以外には使用しないことを説明し、回収にて同意が得られたものとした。また、結果は個人が特定できないように統計処理した。

VI. 結果

調査用紙、154人に配布し140人から回収を得た(回収率90%)。未記入項目の多い7人を除き、総数133人を分析の対象とした(有効回答率86%)。

1. 対象者の属性(表1)

学生の平均年齢は19.3±4.3歳で、男性15人、女性118人であった。母集団の特徴として社会人経験者が全体の15%を占めており、そのうち医療福祉関係の職業は2%であった。

表1 対象者の属性

	全体 n=133	26年度 n=77	27年度 n=56
年齢 平均(SD)	19.2 (3.8)	18.6 (2.4)	19.2 (3.8)
性別 男性	15	9	6
女性	118	68	50

2. 死生観尺度

1) ワーク前後の死生観尺度の得点(表2)

話し合い前後の死生観尺度の得点は、ワーク前26年度107.1(±17.7)、ワーク後112.6(±19.3)であった。27年度はワーク前105.4(±20.1)、ワーク後106.4(±17.9)で、有意差は認められなかった。男性はワーク前26年度94.6(±16.3)、ワーク後106.5(±19.3)で女性はワーク前26年度107.9(±8.5)、ワーク後110.4(±18.9)で、男性で有意な差を認めた。

表2 ワーク前後の死生観尺度得点

	n	ワーク前平均値	ワーク後平均値	t 値
26 年度	77	107.1 (±17.7)	112.6 (±19.3)	0.603
27 年度	56	105.4 (±20.1)	106.4 (±17.9)	0.604
全体・男性	15	94.7 (±16.4)	106.5 (±19.3)	0.009**
全体・女性	118	107.9 (±8.5)	110.4 (±18.9)	0.452

有意水準:**p<.01

2) ワーク前後の死生観尺度因子の得点 (表3)

死生観尺度因子の話し合い前後を比較して、有意差が認められたのは、26 年度で第3因子『解放としての死』の「私は、死をこの世の苦しみから解放されることだと思っている」(p=0.021, p<0.05)、第6因子『死への関心』の「家族や友人と死についてよく話す」(p=0.004, p<0.01)であった。27 年度で第1因子『死後の世界観』の「死んでも魂は残ると思う」(p=0.038, p<0.05)、第5因子『人生における目的・意識』の「私は人生の意義、目的、使命を見出す能力が十分にある」(p=0.038, p<0.05)と「私の人生について考えると、今ここにこうして生きている理由がはっきりとしている」(p=0.037, p<0.05)であった。全体としては、第5因子『人生における目的・意識』の「私は人生の意義、目的、使命を見出す能力が十分にある」(p=0.021, p<0.05)と「私の人生について考えると、今ここにこうして生きている理由がはっきりとしている。」(p=0.047, p<0.05)と第6因子『死への関心』の「身近な人の死をよく考える」(p=0.034, p<0.05)と「家族や友人と死についてよく話す」(p=0.003, p<0.01)であった。

表3 ワーク前後の死生観尺度因子の平均値の比較

項目	全体			26 年度			27 年度		
	前	後	p 値	前	後	p 値	前	後	p 値
第1 因子：死後の世界観									
1 死後の世界はあると思う	5.45	5.58	0.502	5.35	5.51	0.553	5.59	5.68	0.743
2 世の中には「霊」や「あたり」があると思う	5.47	5.34	0.523	5.60	5.36	0.387	5.70	5.30	1.000
3 死んでも魂は残ると思う	5.17	5.51	0.082	5.19	5.34	0.590	5.13	5.75	0.038*
4 人は死後、また生まれ変わると思う	5.05	5.36	0.143	4.96	5.35	0.181	5.18	5.38	0.514
第2 因子：死への恐怖・不安									
1 死ぬことが怖い	5.29	5.13	0.469	5.19	5.31	0.430	4.96	4.88	0.814
2 自分が死ぬことを考えると不安になる	4.99	5.07	0.743	4.96	5.26	1.000	4.63	4.80	0.638
3 死は恐ろしいものだと思う	5.01	4.71	0.202	4.53	4.79	0.229	4.82	4.61	0.565
4 私は、死を非常に恐れている	4.33	4.26	0.750	5.26	4.42	0.631	4.02	4.04	0.963
第3 因子：解放としての死									
1 私は、死とはこの世の苦しみから開放されることだと思っている	3.21	3.40	0.366	5.14	3.82	0.021*	3.27	2.82	0.132
2 私は、死をこの人生の重荷からの解放と思っている	3.11	3.17	0.758	4.56	3.58	0.099	3.05	2.59	0.085
3 死は痛みと苦しみからの解放である	3.38	3.53	0.507	3.17	3.99	0.073	3.27	2.89	0.220
4 死は魂の開放をもたらしてくれる	3.33	3.26	0.740	3.14	3.56	0.411	3.32	2.86	0.135
第4 因子：死からの回避									
1 私は、死について考えることを避けている	3.20	3.05	0.422	3.47	2.99	0.297	3.11	3.13	0.949

2	どんなことをしても死を考えることを避けたい	2.77	2.63	0.482	3.34	2.70	0.927	2.84	2.54	0.290
3	私は死についての考えが思い浮かんでくるといつもそれはねのけようとする	2.82	2.76	0.761	3.27	2.82	1.000	2.82	2.68	0.637
4	死は恐ろしいのであまり考えないようにしている	2.92	2.79	0.479	2.73	2.87	0.626	2.84	2.68	0.601
第5因子：人生における目的・意識										
1	私は人生にはっきりとした使命と目的を見出している	4.29	4.62	0.069	2.82	4.65	0.169	4.25	4.57	0.240
2	私は人生の意義、目的、使命を見出す能力が十分にある	3.87	4.27	0.021*	3.01	4.23	0.204	3.79	4.32	0.038*
3	私の人生について考えると、今ここにこうして生きている理由がはっきりとしている	4.41	4.77	0.047*	4.32	4.68	0.401	4.32	4.91	0.037*
4	未来は明るい	4.94	5.26	0.077	3.93	5.16	0.187	5.09	5.41	0.238
第6因子：死への関心										
1	「死とは何だろう」とよく考える	4.94	4.72	0.707	4.47	4.83	0.201	5.59	4.57	0.442
2	自分の死について考えることがよくある	4.12	4.50	0.094	4.83	4.66	0.107	4.02	4.27	0.482
3	身近な人の死をよく考える	4.42	4.86	0.034*	4.47	4.90	0.154	4.30	4.82	0.113
4	家族や友人と死についてよく話す	3.02	3.68	0.003**	4.19	3.91	0.004**	3.00	3.36	0.243
第7因子：寿命観										
1	人の寿命はあらかじめ「決められている」と思う	3.71	3.87	0.504	4.51	3.82	0.878	3.63	3.95	0.377
2	寿命は最初から決まっていると思う	3.60	3.83	0.352	3.04	3.64	0.472	3.55	3.77	0.558
3	人の生死は目に見えない力(運命・神など)によって決められている	3.63	3.95	0.134	3.77	3.57	0.107	3.71	3.84	0.700

有意水準: *p<.05 **p<.01

3) 死生観尺度の項目別得点 (表4)

死生観の項目別得点の平均は、26年度の死後の死生観21.1(SD5.4)、死への恐怖・不安20.5(SD6.1)、解放としての死13.1(SD5.5)、死からの回避11.8(SD6.1)、人生における目的意識17.6(SD4.3)死への関心16.2(SD5.2)、寿命観11.0(SD5.4)であった。27年度の死後の死生観21.2(SD4.9)、死への恐怖・不安18.4(SD7.2)、解放としての死12.9(SD5.2)、死からの回避11.6(SD5.5)、人生における目的意識17.5(SD4.6)死への関心16.9(SD11.6)、寿命観10.9(SD4.6)であった。死後の世界観がほかの項目に比べると特に高くなっており、死後の世界の存在を信じ、世の中には「霊」や「あたり」があると思っている学生が多かった。反対に寿命観の得点は低く、寿命は最初から決まっているとは思っていなかった。

表4 死生観の項目別得点

死生観の項目	26年度平均 (SD)	27年度平均 (SD)
死後の世界観	21.1 (5.4)	21.2 (4.9)
死への恐怖・不安	20.5 (6.1)	18.4 (7.2)
解放としての死	13.1 (5.5)	12.9 (5.2)
死からの回避	11.8 (6.1)	11.6 (5.5)
人生における目的意識	17.6 (4.3)	17.5 (4.6)
死への関心	16.2 (5.2)	16.9 (11.6)
寿命観	11.0 (5.4)	10.9 (4.6)

4) 死生観の因子間の関係性 (表5)

死生観の因子間においてどのような関係性が存在するのかを検証するために、スピアマンの順位相関関係を算出したところ、死からの回避と死後の世界観 ($\rho = -0.134, p < 0.05$)、死への恐怖・不安 ($\rho = 0.407, p < 0.01$) に相関が認められた。人生における目的・意識と死後の世界観 ($\rho = 0.154, p < 0.05$)、死への恐怖・不安 ($\rho = -0.134, p < 0.05$)、死への関心 ($\rho = 0.293, p < 0.01$)、寿命観 ($\rho = 0.145, p < 0.05$) に相関が認められた。死への関心と死後の世界観 ($\rho = -0.217, p < 0.01$)、寿命感 ($\rho = 0.239, p < 0.01$) に相関が認められた。寿命観と死後の世界観 ($\rho = 0.357, p < 0.01$) に相関が認められた。

表5 死生観因子の相関

	死からの回避	人生における 目的・意識	死への関心	寿命観
死後の世界観	-0.134*	0.154*	-0.217**	0.357**
死への恐怖・不安	0.407**	-0.134*		
死への関心		0.293**		
寿命観		0.145*	0.239**	

有意水準* $p < .05$ ** $p < .01$

3. ワーク終了後の「生と死」への思い (表6)

学習後の「生と死」への思いは、その文脈から6つのカテゴリーが抽出できた。以下、カテゴリーは【 】で示し、キーワードは「 」で示す。()内はポイントを示す。

まず、死というものをどのような感覚で捉えているかをまとめた【死の世界観】では、「難しい・怖い・嫌な・恐ろしい・避けたい・はかない・辛い」(27)と否定的で特別なものとして捉えるキーワードが最も多かった。次に、生と死に対する興味や意欲である【生と死への関心】では、「考えることが少ない」(16)がある一方で、生は「奇跡的・命を尊重・素晴らしいこと」(6)のキーワードがあった。また、一人称で考えた【生を全うさせる意志】では、「愛が大切・全力で生きる・後悔したくない・今を楽しく・見つめ直す・前向き・生きた証・生きていることが幸せ・出会いや関わりが大切」(26)の肯定的キーワードが多かった。職業人としての意識である【業務としての生と死】では、「命を大切にできる人・対処能力をつける・愛で接する・覚悟・サインを読み取る」(6)などがあった。そして、最期の【看取り】としては、「生を守りながら死を迎える人の援助・最期まで幸せ・死を迎える寂しさ・安らかな死を迎える」(4)などがあった。【死の軽視】としては、「もっと考えるべき・理解者が増えるべき・少なくなるべき・悲しい・命の選別」(7)があった。

ただし、キーワードとは単純にグループ化し概念化できるものではない。今回は、文中の脈絡から内容を確認することや、キーワード同士の関係性を探求するには至っていないことを付け加える。

表6 KJ法の結果 ①ワーク終了後の「生と死」への思いに関する記述

カテゴリー	キーワード	(ポイント)
死の世界観	難しい・怖い・嫌な・恐ろしい・避けたい・はかない・辛い・特別	(27) / 生と隣合わせ・誰にでも・身近・避けられない・背中合わせ (6) / 死後の世界はある (1)
生と死への関心	奇跡的・命を尊重・素晴らしいこと	(6) / 考えることが少ない (16) / 経験がない (1) / 分からない (7)
生を全うさせる意志	愛が大切・全力で生きる・後悔したくない・今を楽しく・見つめ直す・前向き・生きた証・生きていることが幸せ・出会いや関わりが大切	(26) / 命を大切に・親に感謝 (9) / 協力したい (1) / 支えが必要 (1) / 迎えたい (1)
業務としての生と死	命を大切にできる人・対処能力をつける・愛で接する・覚悟・サインを読み取る	(6) / 良い看護師・支えたい (4) / 生と死に深く関わる仕事 (1)
看取り	生を守りながら死を迎える人の援助・最期まで幸せ・死を迎える寂しさ・安らかな死を迎える	(4) / 家族の成長過程 (1)
死の軽視	もっと考えるべき・理解者が増えるべき・少なくなるべき・悲しい・命の選別	(7)

4. 死生観を導き出す教育効果

ワーク終了後の「生と死」への自由記述で、学習成果や学習への動機づけに関するものを示す(表7)。「命の大切さ・生きる意味を考える貴重な体験」「人の意見が心に響いた・新鮮・考えさせられた」「もっと深く真剣に考えたい・話したい」「授業や実習に臨む姿勢が変わる」などは学習の満足度と動機付けとして評価できる内容である。

表7 KJ法の結果 ②ワーク終了後の「学習成果や動機づけ」に関する記述

カテゴリー	キーワード	(ポイント)
新たな知識	色々な死を知った	(7)
学習の意義	命の大切さ・生きる意味を考える貴重な経験	(28) / 人の意見が心に響いた・新鮮・考えさせられた (27) / 自分の考えが人に与える影響を考えた (1) / 充実した時間 (1)
学習の意欲	もっと深く真剣に考えたい・話したい	(10) / 授業や実習に臨む姿勢が変わる (3) / 多く学ぶ必要がある (1) / 大きな課題になる (1)

VII. 考察

1. 看護学生の死生観の特徴

死生観の得点においては、死生観項目の中で死後の世界観の平均点が高かったことは、石田ら(2007)の看護学生の死生観に関する研究と同じ結果であった。また、死への恐怖・不安や死への関心が高いことも同様の結果といえる。その中で石田は、学生は死に直面する機会が少ないことから、死をその人の存在がなくなるのではなく生まれ変わることととらえている人が多く、死を現実のものとして受け止められていない¹⁰⁾と述べている。新見(2002)も、看護学生は死を別の世界にあると認識し、死を自分のこととして向き合えていない学生が多い¹¹⁾ことを明らかにしている。死後の世界観と死からの回避、死への関心は負の相関があることから、死後の世界があると思う学生は死への関心は低く、死について考えようとしなないといえる。また、人生にはっきりとした使命と目的を持ち生きている学生は、死への恐怖・不安は低く、死への関心と寿命観は高いといえる。

本調査では、死生観因子である「人生における目的・意識」と「死への関心」の相関関係が高かった。併せて、ワーク後の自由記述でも、死の世界観を否定的に表現しながらも、自己の生を全うさせ

たいという意識の高さがうかがえた。つまり、グループでの話し合いは生命に対する考えを持ち、職業意識を高めることに効果があったといえる。学生は、「死」に関するテーマを通して、人生における目的・意義を認識し積極的な人生観となっていく。そして、話し合いをすることで他者の死生観に触れ価値観の多様さに気づき、自分自身の死生観の形成につながっていくと考える。今後、具体例の呈示や話し合いを取り入れた学生参加型の授業展開を心がけたい。

2. 看護学生のワーク前後の変化と男女差

全体的にワーク前後の死生観尺度の平均点に差は認められなかった。これは、思索の方向性を具体的に示さなかったことや、すぐに受け止め方が変わる内容ではないことがうかがえる。今後、実習等でその人らしさを追求し、人生の一部分に深く関わることの責任と役割を考えながら具体的援助方法を模索することが重要である。また、男子学生に関しては死生観尺度の変化が大きく現れた。加藤ら(1980)は、青年期における情動的共感性の特質として、発達段階が進むにつれて「感情的被影性」は高くなり、男子より女子の方が感情的影響を受けやすいとしている¹²⁾。もともと、発達段階と感受性の傾向には男女差があることを示しているが、今回はこれまで生と死について考える機会の少なかった男子学生が、問いをたて考える環境を提供されたことにより、一時的にでも関心が高まったのかもしれない。今後、男性性・女性性としてお互いを尊重し受け止め合えることが、多様な死生観を受け止められる包容力として養われることを期待したい。

3. 看護学生のワーク前後での情意領域の変化

今回の取組みで、死生観自体の大きな変化はなかったが、自身の生き方や看護職への意識を高める意見が多く聞かれた。また、興味を持って他者の意見を受け止め貴重な経験と捉えていた。これは、多様な価値観への柔軟な感性として評価したい。今後の学習経験の積み重ねが、死生観の育成には必要だと考える。協同学習の効果としては、学習者間または教師との交流の機会となり、学生同士の支え合いが満足感に繋がっているように感じた。学習者の感覚が肯定的であるということは、自己開示や親近感あるいは活力の根源となり情意領域の揺さぶりとして学習効果を高めるきっかけとなるだろう。

4. 死生観教育とケアの質を高める効果

学習者にとって全体の中で自らを俯瞰するということは、物事を考える動機づけとして大切なことであり、初期学習者であっても命について協同で考えることは自分自身を問い直す契機となった。安全で安楽な援助とは、先を見通した専門的知識と技術が必要となるばかりではなく、援助者が何を認知しどのように動くかという情意領域に影響するものである。最善の判断と行動がとれるよう、継続した教育の機会が必要である。

VIII. 結語

1. 本研究において得られた内容を、以下にまとめる。

- ①看護学初期学習者の多くは、死を現実のものとして受け止められておらず、死への恐怖・不安が強かった。
- ②看護学初期学習者でも、人生にはっきりとした使命と目的をもっている人は、死への恐怖・不安

は低く、死への関心と寿命感が高かった。

- ③看護学初期学習者の話し合い前後に測定した死生観尺度では、男子が有意に差を認めた。
- ④看護学初期学習者の職業意識を高め積極的な人生観にするには、死を現実として感じられるような具体例の提示や、参加型の授業構成を望む学生が多かった。
- ⑤看護学初期学習者は、命の大切さや生きる意味について考えることを貴重な体験と感じ、人の意見を聞き学ぼうとする人が多かった。
- ⑥看護学初期学習者に行った命に関する協同学習において、死生観育成への大きな変化はなかったが、価値観の多様さに気づき肯定的思考を表現するなど情意領域の育成に効果的だった。

2. 終末期教育の指導計画作成（表9）

看護学生のワーク終了後の学習成果や動機づけ（表6, 7）で最も多かった「命の大切さ・生きる意味を考える貴重な経験」や「人の意見が心に響いた・新鮮・考えさせられた」を受け、「考える経験」としての事例を多く取り入れた構成とし、授業運営上意見交換できる教材を工夫した。教育課程の位置づけについては今後の課題とする。

表9. 終末期教育の指導計画

回	学習内容（キーワード）	授業の進め方
1	死とは何か（終末期ケアと歴史）	講義）学習資料、事例、学びシート
2	死とは何か（老年期の特徴と発達課題、死の概念）	講義）学習資料、事例、学びシート
3	死にゆく人の求めるもの（全人的ケア、看取りの場）	講義）学習資料、事例、学びシート
4	死の受容までのプロセス（キューブラ・ロス）	講義）学習資料、事例、学びシート
5	死への恐怖と不安（人称、自由、孤独）	講義）学習資料、事例、学びシート
6	危篤時の技術（看取り、コミュニケーション、エンゼルケア）	講義）学習資料、学びシート
7	グリーフケア（遺族、悲嘆、QOL）	講義）視聴覚教材、ワークシート
8	グリーフケア（スピリチュアルケア）	講義）視聴覚教材、学びシート
9	終末期における他職種との協働（役割、チームケア）	講義）学習資料、事例紹介、学びシート
10	まとめ	評価

①事例および「学びシート」について

筆者の体験を基にした事例や「うらやましい死に方」^{※1}の収録文を読み、感想を述べ合う時間を設ける。また、毎回授業終了後に「学びシート」を配布し、学びの内容、感想や目標についての記述作業をし、意識的な認知刺激や疑問などに対応するための媒体とする。

②視聴覚教材の選定について

映画「遺体 明日への10日間」^{※2}は、遺体に真摯に向き合い言葉をかける場面や合掌する姿など、尊厳・死後の変化・グリーフケアなどが分かり易く凝縮されている。観て欲しいポイントを予め説明し、問いを立て視聴する。その後ワークシートで考えを整理し、感想を述べ合う材料にする。また、動画「風の電話～もし、この声が届くなら話しを聞いてください！」^{※3}は、亡くなった家族へ話しかけるドキュメンタリー映像で、グリーフケア、スピリチュアルケアについて考え意見交換する材料とする。

※五木寛之編（2014）「完本 うらやましい死に方」文芸春秋、全国から寄せられた投稿集。

※2.君塚良一監督作品（2013日本映画）ジャーナリスト石井光太が、2011年3月11日に発生した東日本大震災直後からの十日間をありのまま綴ったルポルタージュ『遺体 震災、津波の果てに』を実写映像化した作品。

※3.NHKスペシャル「かぜの電話残された人々の声」の一部抜粋で、少年が亡き父親に話しかける場面。

IX. おわりに

看護基礎教育における学修への動機付けは、今後専門的学びを深める上で大変意義深く、学生自身が自分の生と重ねあわせ思考し創造する機会となり、より良く生きる豊かさに繋がるだろう。今後、指導計画に基づいた取組みを評価することで、内容の充実を図りたい。また、今回は看護学生を対象としたのもであったが、今後地域での医療福祉を充実させるためには、看護師と介護福祉士の連携を強化させる必要がある。介護学生へも焦点をあて、途切れのない支援体制を構築させることが課題である。

謝辞

今研究の趣旨を御理解いただき参加して下さったF看護学生の皆様、および御協力いただきました関係の先生方に深謝いたします。

参考 引用

- 1) 内閣府 平成 30 年版高齢社会白書 (全体版) (閲覧 2018.12.1)
https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/zenbun/30pdf_index.html
- 2) 厚生労働省、人口動態調査による人口動態統計(確定数) (閲覧 2018.12.1)
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei17/index.html>
老衰による死亡時の「場所」の推移をグラフ化してみる(最新)
<http://www.garbagenews.net/archives/2283920.html>
- 3) 厚生労働省『医療と介護の一体的な改革』(閲覧 2018. 1. 4)
<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000060713.html>
- 4) 川島孝一郎 (2010)『終末期の生活者を支える相談支援マニュアル策定に関する研究』平成 21 年度厚生労働科学研究補助金 (厚生労働科学特別研究事業)
- 5) 岡本双美子 (2005)『看護師の死生観尺度作成と尺度に影響を及ぼす要因分析』, 日本看護研究学会雑誌 28 (4) : 53.
- 6) 丹下智香子 (1995)『死生観の展開』, 名古屋大学教育学部紀要, 42 : 149-156.
- 7) 風岡たま代, 川守田千秋 (2006)『看護学生の死生観の学年変化に関する一考察—丹下の「死に対する態度尺度」を用いて—』, 聖隷クリストファー大学看護学部紀要 (14).
- 8) 平井啓, 坂口幸弘ら (2000)『死生観に関する研究—死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証—』死の臨床, 23 (1) : 71-76.
- 9) 平成 24 年度、佐賀県教育センター個別実践研究、協同学習 (閲覧 2016. 8. 31)
www.saga-ed.jp/kenkyu/kenkyu_chousa/h24/08%20kateika/jissai2.htm
- 10) 石田順子ら (2007)『看護学生の死生観に関する研究』桐生短期大学紀要, 18 : 109-115.
- 11) 新見明子 (2002)『看護学生の死生観—Purpose in-Life Test の分析より』川崎医療短期大学紀要, 22 : 25-30.
- 12) 加藤隆勝, 高木秀明 (1980)『青年期における情動的共感性の特徴』筑波大学心理学研究, 2 : 33-42.